

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370572

研究課題名(和文) 日英語の語彙的アスペクト 意味の合成性とスケール理論

研究課題名(英文) Lexical Aspect in Japanese and English: Compositionality of Meanings and Scale Theory

研究代表者

磯野 達也 (Isono, Tatsuya)

成城大学・社会イノベーション学部・教授

研究者番号：10368673

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、語彙概念構造や生成語彙論で得られた成果とスケール理論を組み合わせることで、語彙的アスペクトの性質を、日英語を主な対象として明らかにすることを目的とした。

研究成果の概略は以下の通りである。(1)スケール構造を語彙表示に導入することで、動詞のアスペクトをより明確に捉えられるようになった。(2)名詞の意味構造にもスケール構造を仮定することで、動詞句・文レベルでのアスペクトを捉えられるようになった。(3)西日本方言の「しよる・しとる」の振る舞いを研究した。それによって、日英語の語彙アスペクトを比較し、性質を細かく捉えることができた。

研究成果の概要(英文)： The objectives of this research were to comprehend the characteristics of lexical aspect in terms of the relations between verbs and co-occurring phrases, especially focusing on scalar structure of English and Japanese expressions.

In this research, (1) we have elaborated semantic representations by introducing scalar structure in the representation, (2) we have identified the changes of lexical aspects at the level of verb phrases and clauses by incorporating scalar structure into representations of nouns, and (3) we have grasped the characteristics of lexical aspects through the study of dialects used in Western Japan and the comparison of the usages of English and Japanese.

研究分野：英語学

キーワード：語彙意味論 語彙的アスペクト 事象構造 進行形 西日本方言 している しよる しとる

## 1. 研究開始当初の背景

語彙意味論研究では、動詞、名詞、形容詞など様々な範疇の語の振る舞いを原始的な意味素性に分解して語彙概念構造 (lexical conceptual structure、以下 LCS) で表す研究が行われてきた。動詞については、自他交替、結果構文、移動構文に関わる動詞の意味を LCS で表示することで語の意味と統語的振る舞いの関係性が捉えられ、同時に構文の意味表示も明らかにされた。

名詞については、その多義性やある名詞とその上位あるいは下位の概念を表す語との意味的關係を表すために Pustejovsky (1995) が、生成語彙論 (以下、GL) を提案し、特質構造を提案した。John began a book. が「本を読み始めた」あるいは「本を書き始めた」という意味を表すことは、名詞の特質構造と意味操作で説明される。

一方、Hay et al. (1999) は、形容詞由来の下にあるような状態変化動詞の意味的特徴を捉えるためにスケール構造を意味表示に導入した。[a] は ( ) 内の意味を含意しないが [b] はする。これは、閉鎖スケール (closed scale) と開放スケール (open scale) を仮定することで説明される。スケール理論によって、結果構文の 2 次述語として現れる形容詞の性質などが適切に捉えられるようになった。

- [a] They are straightening the rope.  
(× They have straightened the rope.)  
[b] They are lengthening the rope. ( They have lengthened the rope.)

## 2. 研究の目的

GL や LCS の研究の進展にも関わらず、未だに明らかになっていないことも多く、本研究では次の 3 点を明らかにすることを目的とした。

- (1) 語彙的アスペクトの由来 (動詞と名詞の意味の合成の仕組み)
- (2) スケール理論の汎用性
- (3) 日英語の比較による語彙アスペクトの解明

語彙的アスペクトについては、Vendler (1965) に基づいて、LCS でもその意味表示が提案されている。しかし、詳細に一つ一つの例を見ていくと、不明な点も残されている。break は到達述語で瞬時的であると考えられているが、次のような進行形の文も容認される。

[a] The TV set is breaking.  
到達述語が進行形で用いられるとき「スローモーションの解釈」と説明されることがあるが、この例にはその説明はあてはまらない。Kearns (2011) では、このような到達述語は最終的な状態変化に至るまでの過程を有している、と説明しているが、その意味表示自体は明らかではない。

状態変化動詞を分析することから提案されたスケール構造は、状態変化のみならず、

[b] のような移動についてもその経路をスケールと考えることで移動動詞にも応用できると考えられる。しかし、[a] に対して [c] が容認されず、[e] よりも [d] の容認度が低いのは、動詞だけでなく主語名詞句と動詞の意味的關係によるものである。この容認度の違いはこれまで語用論的な問題として扱われたこともあったが、意味の合成性を仮定するのであれば、主語名詞句と動詞の意味がどのように合成してここに見られる容認度の違いが生じるのかを説明する必要がある。

- [b] 花子は 3 キロを 30 分で歩いた。  
[c] \*My tea cup is breaking.  
[d] #バスがバス停に到着しています。(進行形の解釈)  
[e] ?電車が 1 番線に到着しています。(進行形の解釈)

場所理論の考え方を採用すると、空間的な移動と抽象的な変化は並行的に扱えるはずで、スケール理論を汎用的に利用できる可能性を追求する。

日本語の「している」は進行を表す用法とともに [e] のように状態を表す用法があるが、近い未来を表すことはない。英語の進行形が状態を表さず、近い未来を表すことがあることと対照的である。「している」と英語の進行形の用法を検証していくことで、日英語の相違と語彙アスペクトの性質をより明確に捉えることが本研究の 3 つ目の目的である。

## 3. 研究の方法

日英語の語彙的アスペクトに関する先行研究を参照しつつ、LCS、GL とスケール理論の統合を図り、動詞の語彙的アスペクト、動詞と共起する (内項と外項としての) 名詞句とで構成されるアスペクトを分析して、その形式化を行った。さらに、日本語の語彙的アスペクトについても、理論の精緻化を図るために分析を行った。初年度は英語について、2 年目以降は日本語について分析を行い、理論の体系化を行った。主な方法としては、データベースを中心としたコーパス研究と各言語の話者によるインフォーマントチェックを行い、また学会で情報収集を行い、研究目的の達成に努めた。

## 4. 研究成果

### (1) スケール構造

スケール理論は、Hay et al. (1999) で提案されて以来多くの研究がなされ、形容詞や状態変化動詞の意味を適切に捉えることができるだけでなく、移動の漸進的な変化を捉えるためにも有効であると考えられている。本研究では、大まかに 5 種類のスケールを仮定した。[1a-d] は段階的なスケールで、はその一端が閉じていることを示し、>> または << は一端が開いていることを示す。スケールの両端が閉じている場合、両端が開いている場合のほか、片方が閉じ、もう片方が開いているスケールも存在する。[1e] は段階的なスケール

ールをもたず、両極のみをもつ場合である。

[1] スケールの種類 (簡易表記)

- a. -----
- b. <<----->>
- c. ----->>
- d. <<-----
- e.

(2) 意味表示へのスケール構造の導入

本研究ではスケールの概念を意味表示に導入し、変化・移動事象と関連づけた。本研究で扱う語彙表示は Pustejovsky (1995)、Isono (2010) に従い、移動・変化を表す事象は過程事象で、特質構造内で *move*(e, x) で表される。本稿で導入するスケールが結びつけられるのは、この移動・変化の事象で、その事象が固有にもつ特質構造の構成役割 (constitutive role) 内に表示される。[2] の例では、主体役割 (agentive role) 内の移動事象がもつ構成役割内でスケール構造が表示されている。

[2] *pull*:

```
event structure = RESTR = e1    e2
qualia structure = AGENTIVE =
                    [act-on(e1, x, y)
                     move(e2, y)
                     [CONST = --->>]]
```

[2] のような意味表示を仮定することで、[3a] の「急いで丸太をひき、丸太の移動は遅かった」という解釈があり、丸太が移動していく状況も表しており移動の事象があること、[3b] の丸太の漸進的な移動を表すことを捉えることができる。

[3] a. In a hurry they pulled the log along the stairs slowly.

b. They pulled the log halfway.

(3) 瞬時的な動詞の進行形用法の説明

自動詞の *break* は瞬時的な変化を表わすので、[1e] の二項対立的なスケール構造をその構成役割にもつと考えられるが、[4] のように進行形と用いられる場合がある。ここではテレビのさまざまなパーツが少しずつ調子が悪くなり、言ってみれば「テレビが少しずつ壊れつつある」といったことが表されている。

[4] The TV is breaking.

テレビにはさまざまな部品があるが、それらが完全に機能している状態から完全に壊れてテレビとして機能できなくなる状態に至るまでのスケールが、心的辞書に書き込まれていると考えることができる。このことは名詞句 *TV set* の語彙表示中の形式役割に、[5] のようなスケールを仮定することで捉えることができる。そして、*TV set* と *break* がともに用いられることで、[6] に示すように項である名詞句の形式役割が、動詞の *move* 関数の構成役割を書き換えることで (coercion)、漸進的な変化が表され、進行形との共起が可能になると考えることができる。

[5] *TV set*: [FORMAL = ---- ]

[6] *break*:

```
argument structure =ARG1=TV set
                    [FORMAL= ---- ]
qualia structure =
                    [AGENTIVE=move(e1, TV set)
                     [CONST= ---- ]
                     FORMAL=broken-state(e2, TV set)]
```

(4) 動詞の意味とスケール構造

本研究では、位置変化動詞、状態変化動詞、創出動詞などいくつかの動詞タイプについて、その意味表示とスケール構造を検討した。動詞タイプとそのスケール構造についての例は以下の通りである。

[7]

	動詞	スケール構造	瞬時性
移動・位置変化	walk	----->>	
	pull	----->>	
	put		
	arrive		
状態変化	build, melt	-----	
	break (自動詞)		
	死ぬ	<<-----	

また、次の点を明らかにした。

[8] a. スケール構造を動詞の意味表示に導入することで、移動、位置変化、状態変化、瞬時性などをより精緻に捉えることができる。

b. 共起する名詞句 (項) とのスケール構造の合成を仮定することで、同一の動詞の解釈の揺れが説明できる。

(5) 津山方言 (岡山県) の「しよる・しとる」の用法

日英語の語彙アスペクトを比較し、性質を細かく捉えるために、岡山県津山周辺で用いられる「しよる・しとる」の振る舞いを調査・分析した。

工藤 (1995) を始めとする一連の研究で明らかにされている 6 つの用法について、津山方言でそれらが使われるかどうかについて検討した。

過程 (動作継続過程、変化継続過程)

過程については、次の 3 種類の動詞タイプが「しよる」「しとる」と組み合わせられることで表現される。

主体動作動詞

- [9] a. 友達を待ちよる。
- b. 友達を待つとる。

主体動作主体変化動詞

- [10] a. 出口から出よる。
- b. 出口から出とる。

主体動作客体変化動詞

- [11] a. シートベルトをはずしよる。
- b. シートベルトをはずしとる。

主体動作主体変化動詞、主体動作客体変化動詞は、「しとる」とともに用いられた場合は、結果状態も表すので曖昧である。

直前 (動作開始直前、変化開始直前)

「直前」も3つの動詞タイプで「しよる」によって表現される。「しとる」では表現されない。

- [12]a. 飛行機が飛びよる。主体動作動詞  
b. 出口から出よる。  
主体動作主体変化動詞  
c. シートベルトをはずしよる。  
主体動作客体変化動詞

### 結果(主体の必然的結果、客体の必然的結果)

「結果」は状態を意味に含む動詞タイプに関して「しとる」と組み合わせで用いられるときに表される。

- [13]a. 出口から出とる。(出た後で、外にいる) 主体動作主体変化動詞  
b. 服を乾かしとる。  
主体動作客体変化動詞  
c. わたし、あきらめとる。心理動詞  
d. 山の頂上が見えとる。可能動詞  
主体動作主体変化動詞、主体動作客体変化動詞は、「しとる」は「過程」を表すことでもあるので、曖昧である。

### 痕跡(偶然的結果)、経験記録(以前の動作の効力)

これらは、どの動詞タイプについても「しとる」とともに用いられるときに表現されるようだが、詳細については、さらに調査が必要。

### 反復(反復習慣)

「反復」については、どの動詞タイプでも「しよる」「しとる」との組み合わせで表現されるようだが、さらに調査が必要。

### まとめ

津山方言の「しよる」「しとる」の用法についてまとめると、大筋で工藤(1995)で報告されている用法と一致している。しかし、細かい点では工藤(1995)で報告されていないものもあり、それは以下の点である。

- [14]a. 「過程」の用法については、主体動作動詞(非限界的)の場合、差が見られない。  
b. 主体動作主体変化動詞、主体動作客体変化動詞の「しとる」は、「過程」と「結果」の解釈が可能で曖昧である。  
c. 心理動詞では、主語が一人称の場合は「しよる」は容認されないが、三人称の場合は、「しよる」「しとる」ともに容認される。  
d. 可能動詞の場合は、基本的に「しよる」「しとる」ともに容認される。「しよる」は瞬時的な現象を表す場合には容認されにくい。

### (6)「している」「しよる」「しとる」の意味表示

3つの表現と動詞の語彙アスペクトの関係について、分析を行い、概略的な意味表示を提案した。「移動・変化」の事象から「状態」に移るときには推移(transition)がある。また、ある活動・行為や移動・変化などが起こる直前にも推移に似た部分(開始限界)があ

ることから、次のような事象を動詞の意味表示に仮定する。(概略的な表示)

- [15]動詞が表す事象(これらのいずれか、あるいは、組み合わせ)  
(開始限界)「行為・活動」+「移動・変化」(推移)「状態」

3つの表現が意味的に取り立てる部分を下線で示すと次のようになる。

- [16]  
a. しよる：(開始限界)「行為・活動」+「移動・変化」(推移)「状態」  
b. しとる：(開始限界)「行為・活動」+「移動・変化」(推移)「状態」  
c. している：(開始限界)「行為・活動」+  
「移動・変化」(推移)「状態」

「しとる」が行為や移動変化を取り立てて、進行形のように用いられることから、「している」と用法が類似している。両者は、時間的に幅のある、均質的な事象を取り立てる。それに対して、「しよる」は動的な事象を取り立て、英語の進行形と同様に瞬時的な事象も取り立て、その場合は近い未来を表す解釈となる。

<引用文献>

Hay, Jennifer, Christopher Kennedy, and Beth Levin (1999) "Scalar Structure Underlies Telicity in 'Degree Achievements' ". In Tanya Matthews and Devon Strolovitch (eds.) *Semantics and Linguistic Theory IX*, 127-144. Ithaca, NY: CLC Publications.

Kearns, Kate. (2011) *Semantics*<sup>2nd</sup>. New York: Palgrave Macmillan.

Pustejovsky, James (1995) *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca and New York: Cornell University Press.

磯野達也 (2010) 「アスペクト概念と動詞の事象構造 -瞬時性とスケール構造-」 『くらしき作陽大学研究紀要』 43.1:73-84.

工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト -現代日本語の時間の表現-』 ひつじ書房.

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

磯野達也、日本語の動詞と語彙アスペクト -岡山県津山方言の「しよる」「しとる」の用法調査中間報告、成城大学社会イノベーション研究、査読無、Vol. 13, No. 1, 2018, pp. 19-36,  
<http://id.nii.ac.jp/1109/00005010/>

磯野達也、動詞のアスペクトと瞬時性について -スケール構造を導入した語彙の意味表示の一考察、成城大学社会イノベーション

ン研究、査読無、Vol. 11、No. 2、2016、pp. 135-147、  
<http://id.nii.ac.jp/1109/00003669/>

〔学会発表〕(計3件)

磯野達也、日本語の動詞と語彙的アスペクト、レキシコン研究会、2018

磯野達也、動詞の事象構造 語彙的アスペクトとスケール理論、レキシコン研究会、2014

磯野達也、動詞のアスペクト・スケール構造・共合成について、関西レキシコンプロジェクト2014

〔その他〕

磯野達也、言葉・文法の不思議、成城教育、査読無、Vol. 172、2016、pp. 72-19

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

磯野 達也 (ISONO, Tatsuya)

成城大学・社会イノベーション学部・教授

研究者番号：10368673